

学習活動における変容について

-第三者の関わりと変容-

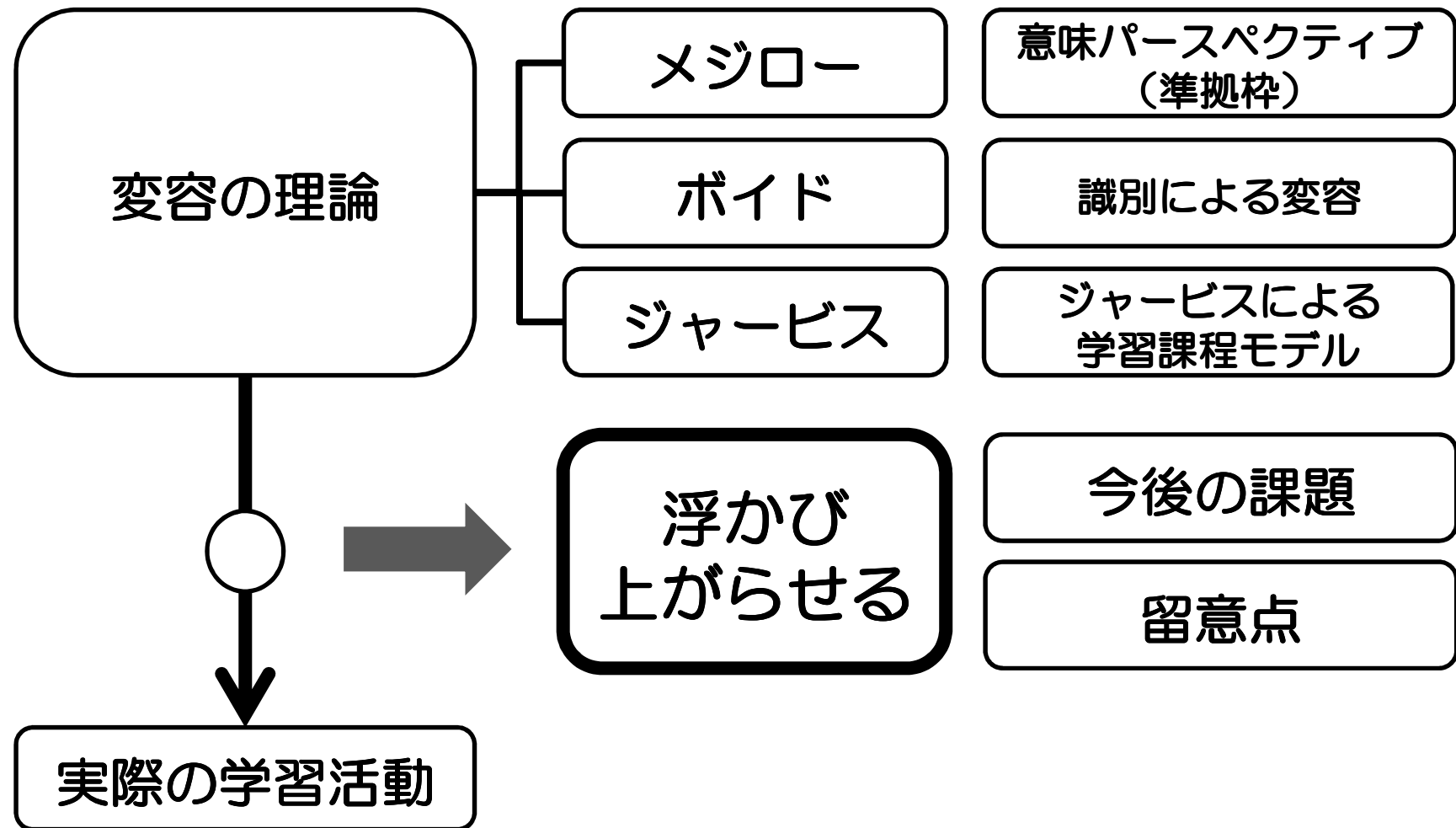
祇園西公民館

石川 哲郎

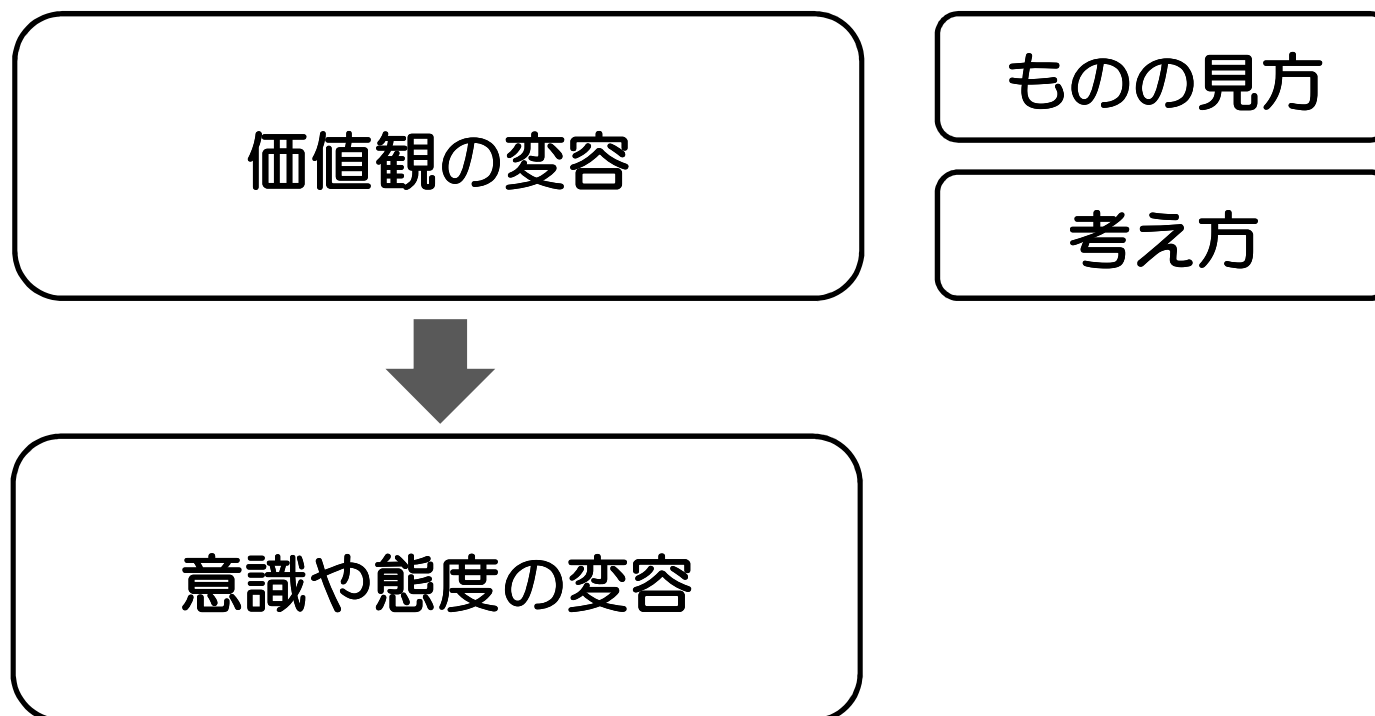
1 はじめに

- 社会教育における意識変容・態度変容（以下、変容とする。）は学習活動上の大きな課題。
- 学習活動が変容に至るまでのメカニズムやプロセスは、実際の学習活動の展開で取り上げられることが少ないように感じる。
- 変容の理論を実際の学習活動にあてはめてみると何が分かるのか。

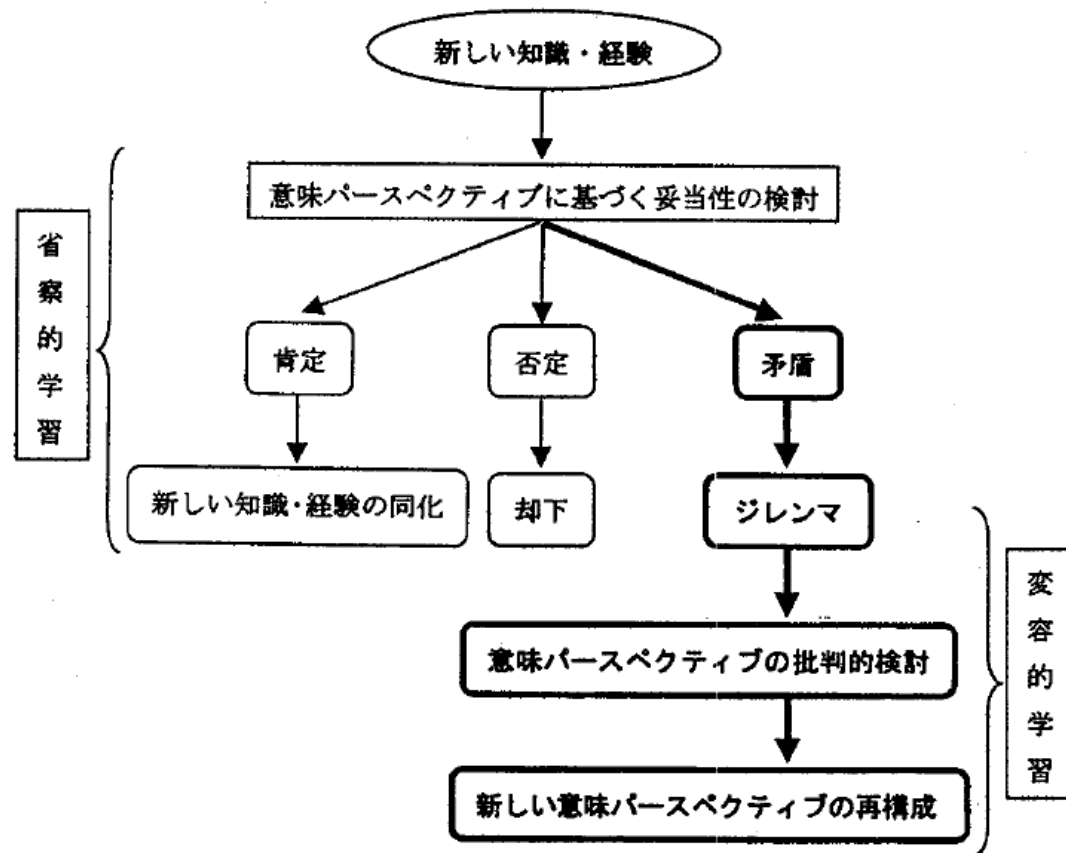
2 ねらい



3 変容とは

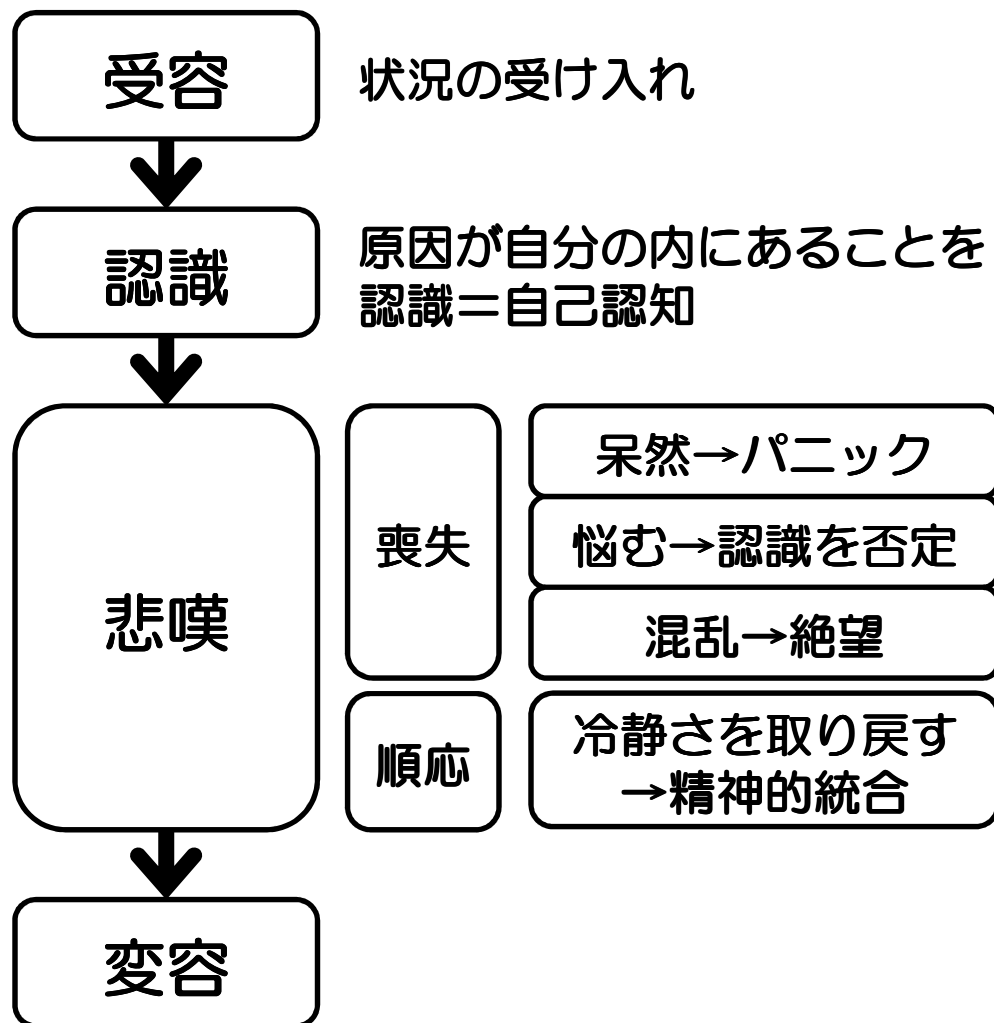


3-1 メジローの変容理論



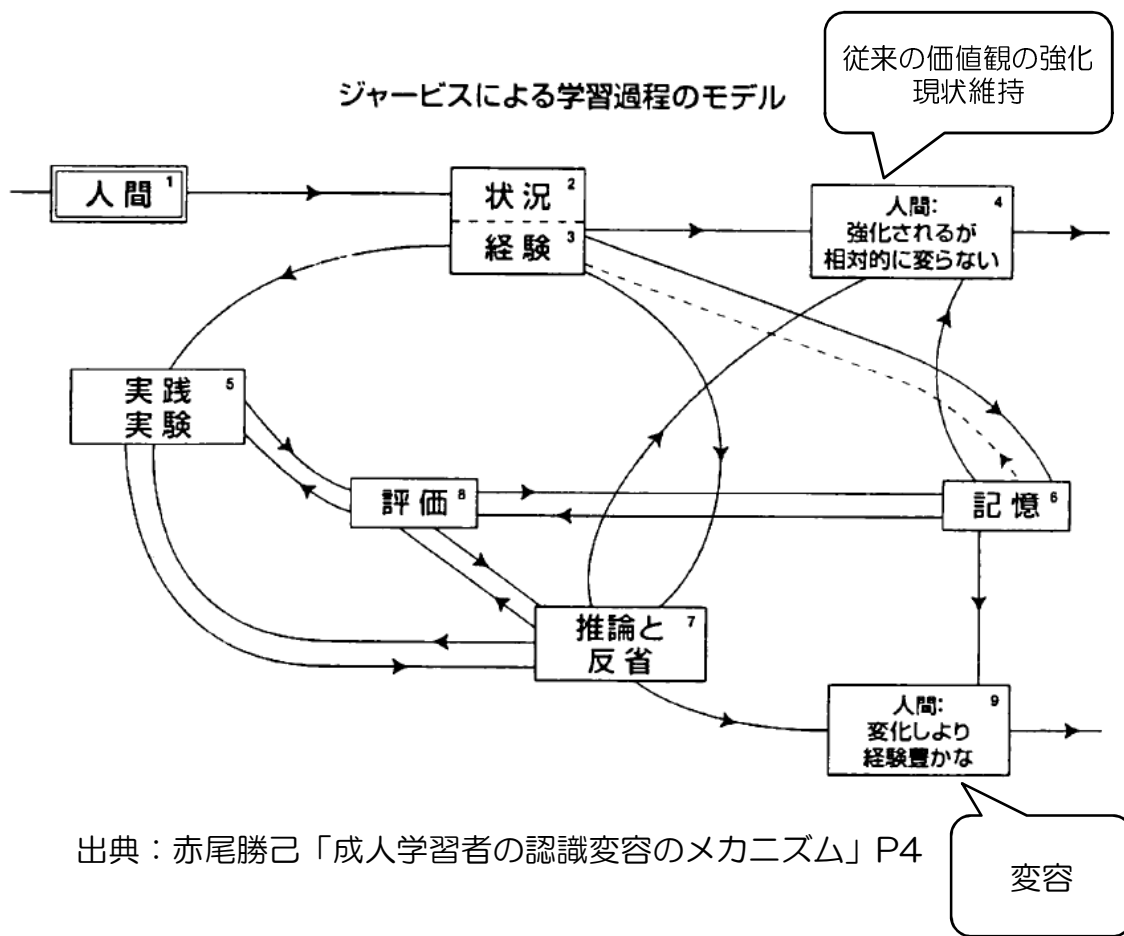
- 学習＝経験の解釈と意味づけを行う行為と定義
- 習慣的に準拠している前提や価値、信念を構成している枠組みによって解釈や意味づけを行っている。
- 準拠している枠組みを「意味パースペクティブ（準拠枠）」と呼んでいる。
- 理性的、意識的な働きにより変容が起きるとしている。

3-2 ボイドの変容理論



- 理性的、意識的なしレベルだけでなく、無意識を含めたトータルな自己に着目。
- 小集団における学習を通じて、無意識を認識することで変容的学習が起こるとしている。

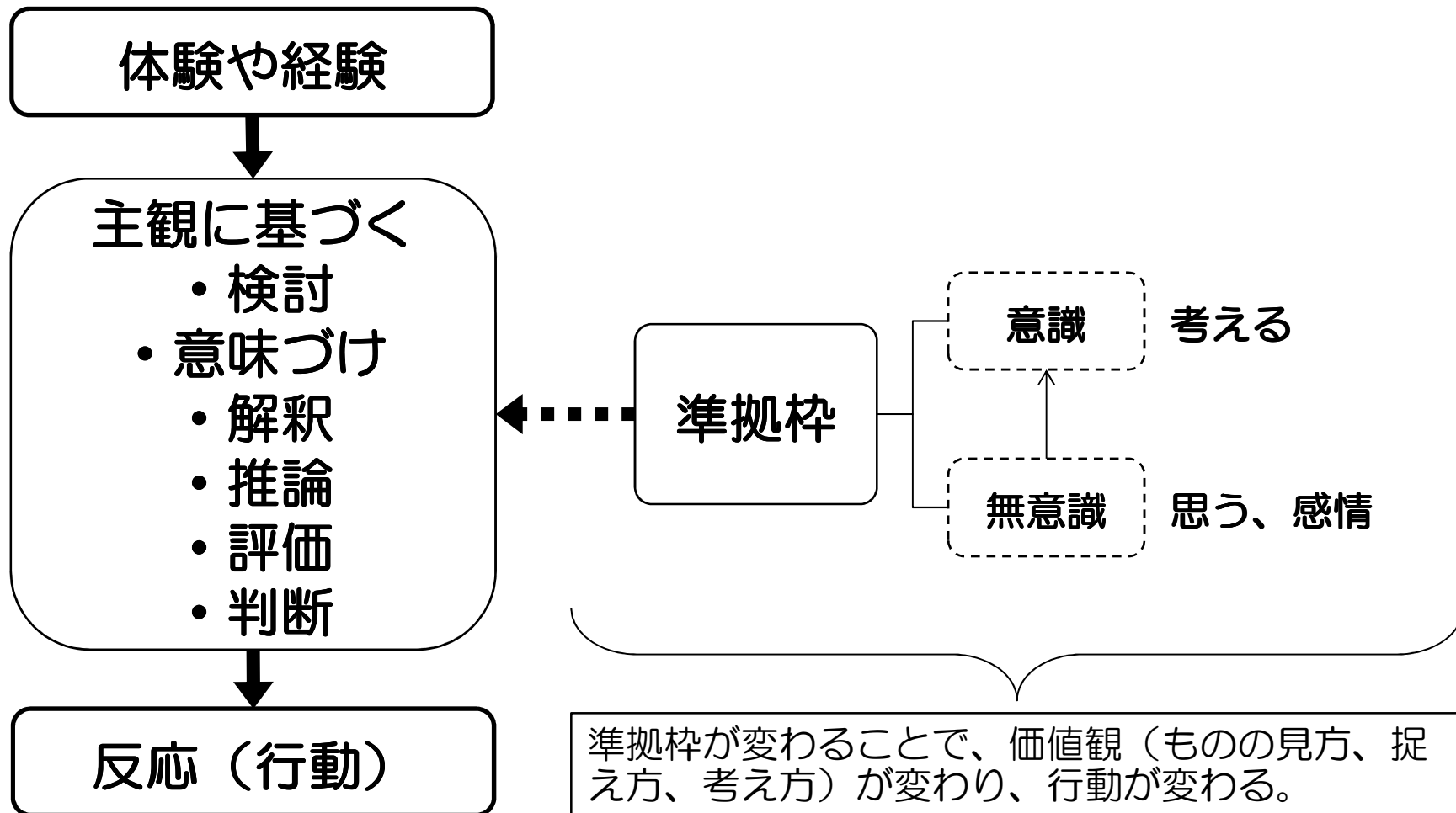
3-3 ジャービスの変容理論



出典：赤尾勝己「成人学習者の認識変容のメカニズム」P4

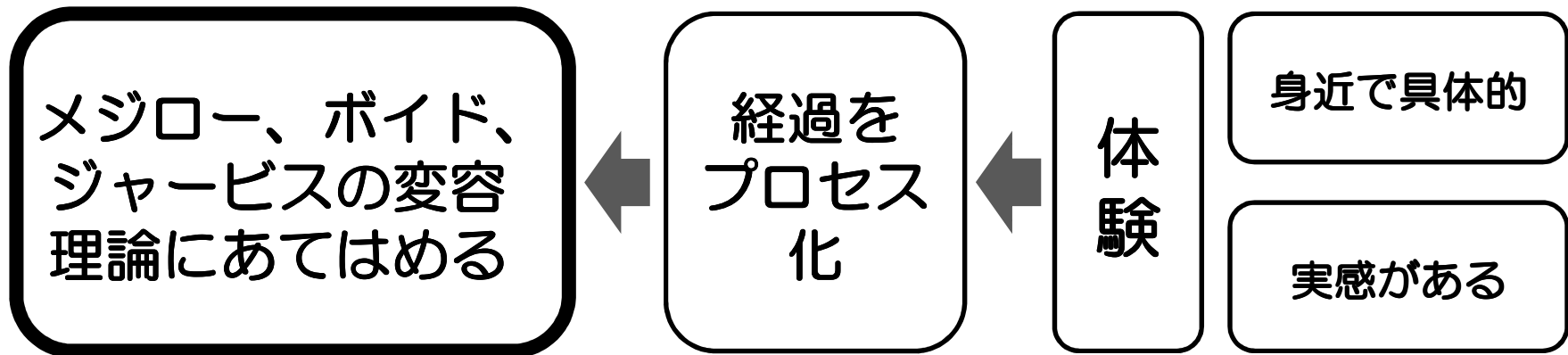
- 学習者は、社会文化的な枠組みの中にあり、学習理論はその環境を考慮する必要があるとしている。
- 上記の考えに基づき、コルブの学習サイクル（具体的な経験→反省的な観察→抽象的な概念化→積極的な実践→具体的な経験…）を一步進めた学習課程のモデルを提示している。

3-4 体験と反応のメカニズム



4-1 事例①

「わたし」の
今回の研究発表に関わる一連の学習活動を
変容理論にあてはめて検証します。

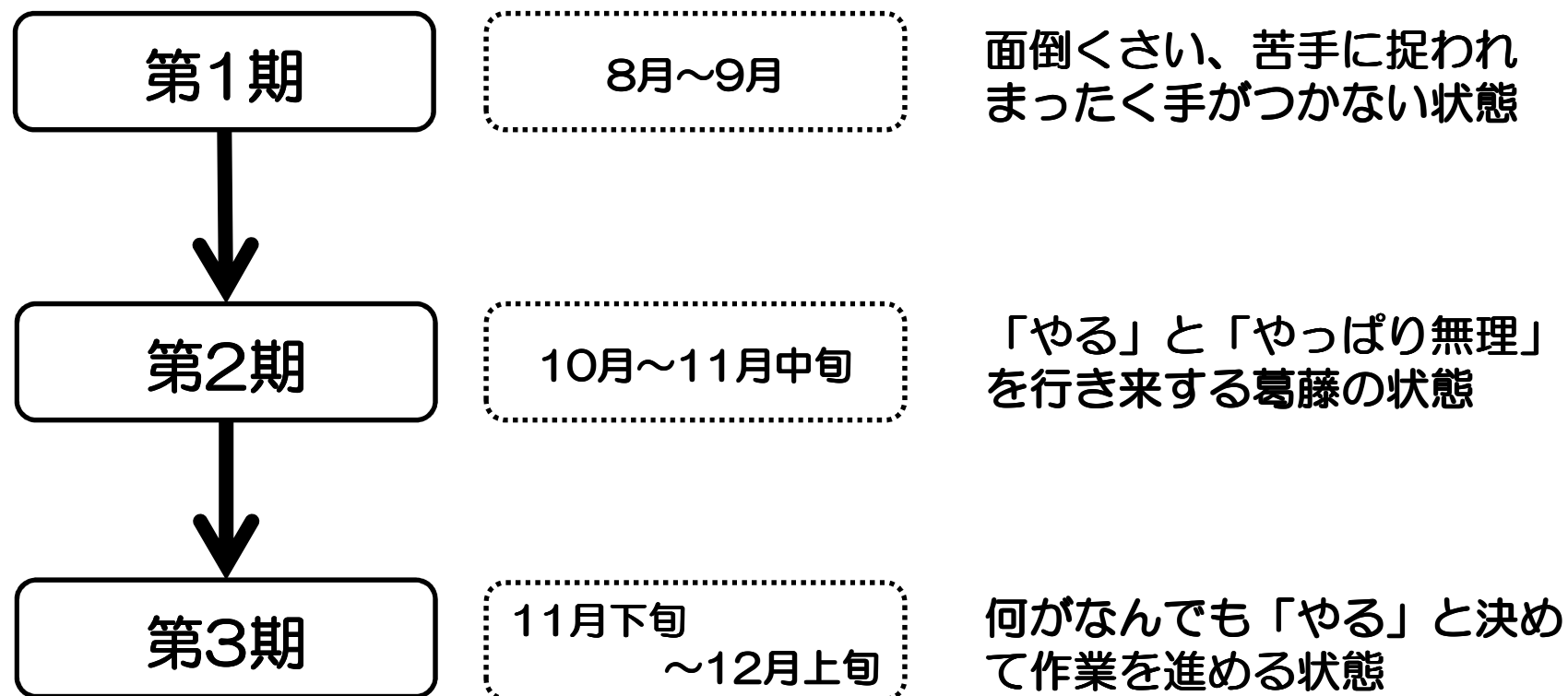


4-2 事例①

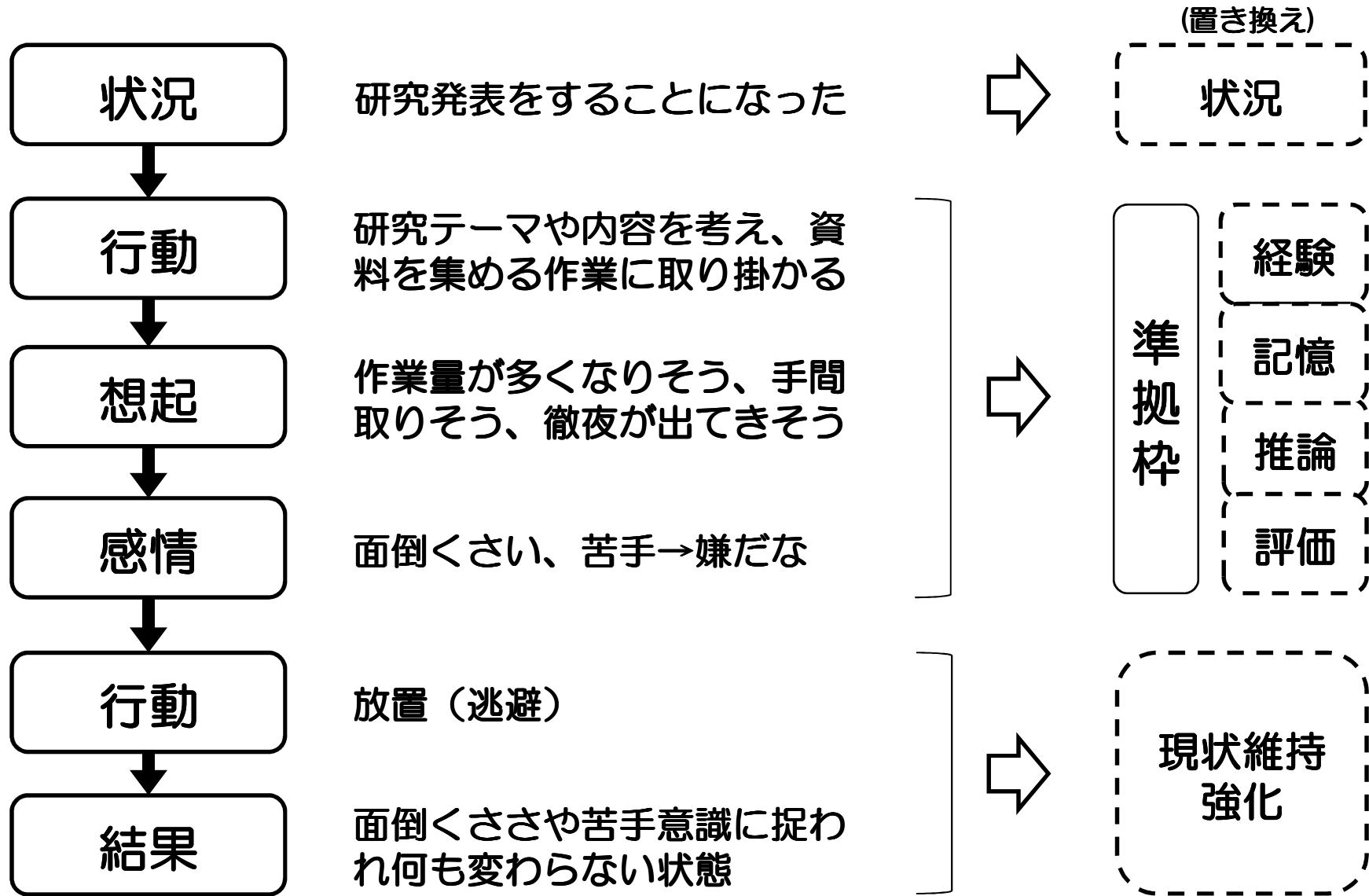
広島県生涯学習センター主催の社会教育職員研修での研究発表活動を取り上げます。

- 平成25年8月から、設定したテーマに基づく研究を行い、12月に発表を行う活動。
- 研究活動での体験等をプロセス化し、検証。

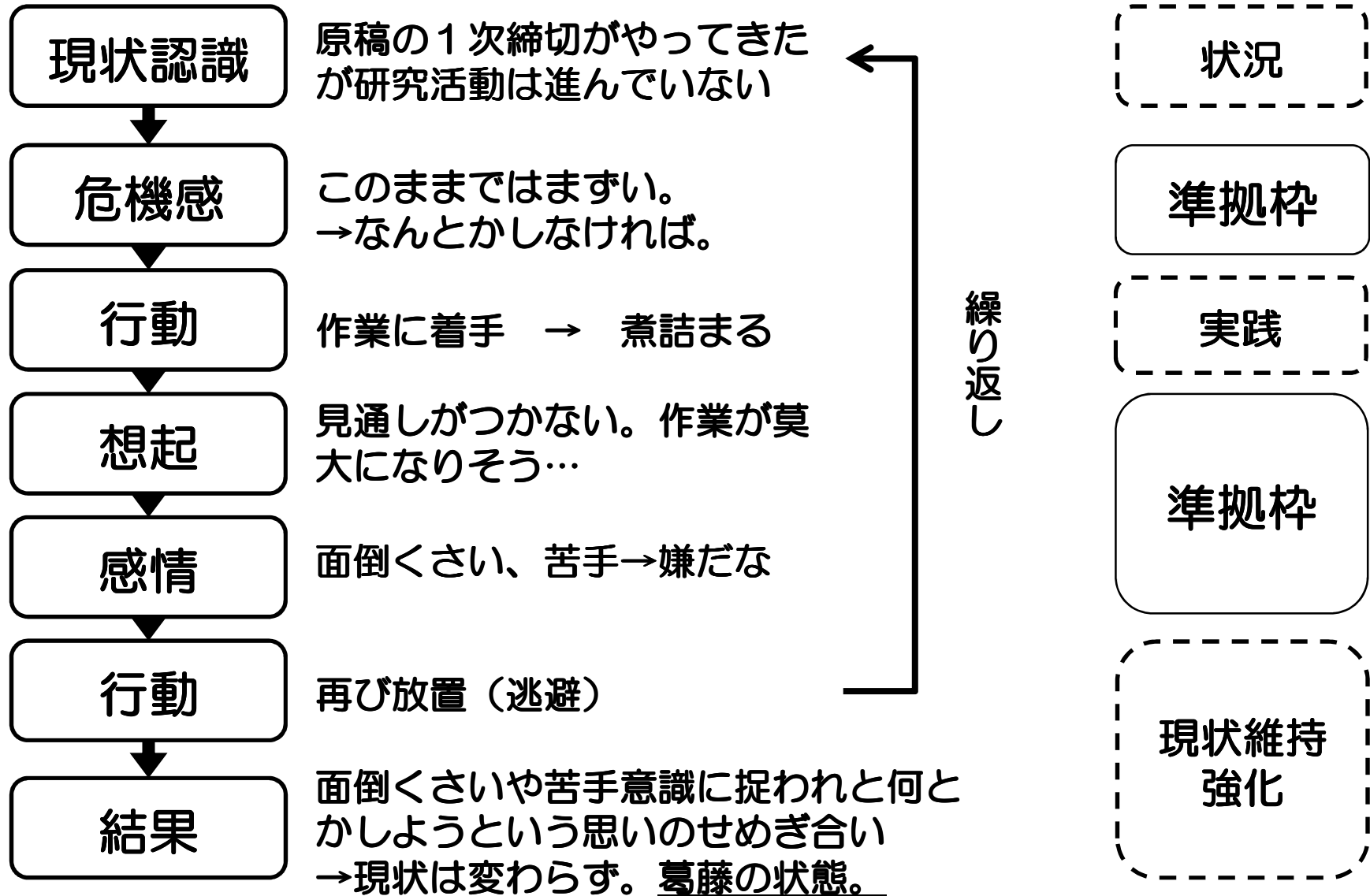
4-3 事例①学習活動の経過



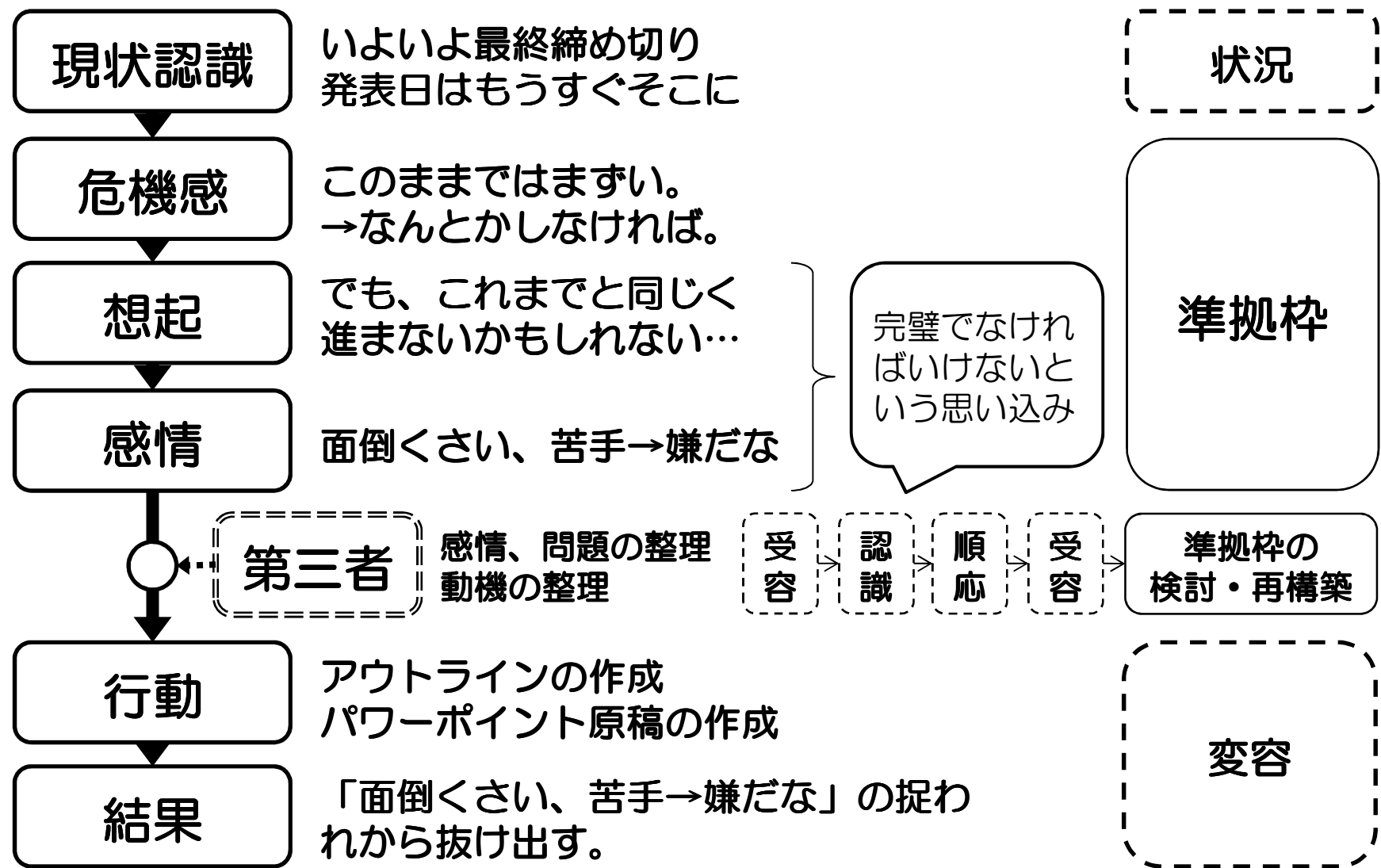
5-1 変容理論への置き換え(第1期)



5-2 変容理論への置き換え(第2期)



5-3 変容理論への置き換え(第3期)



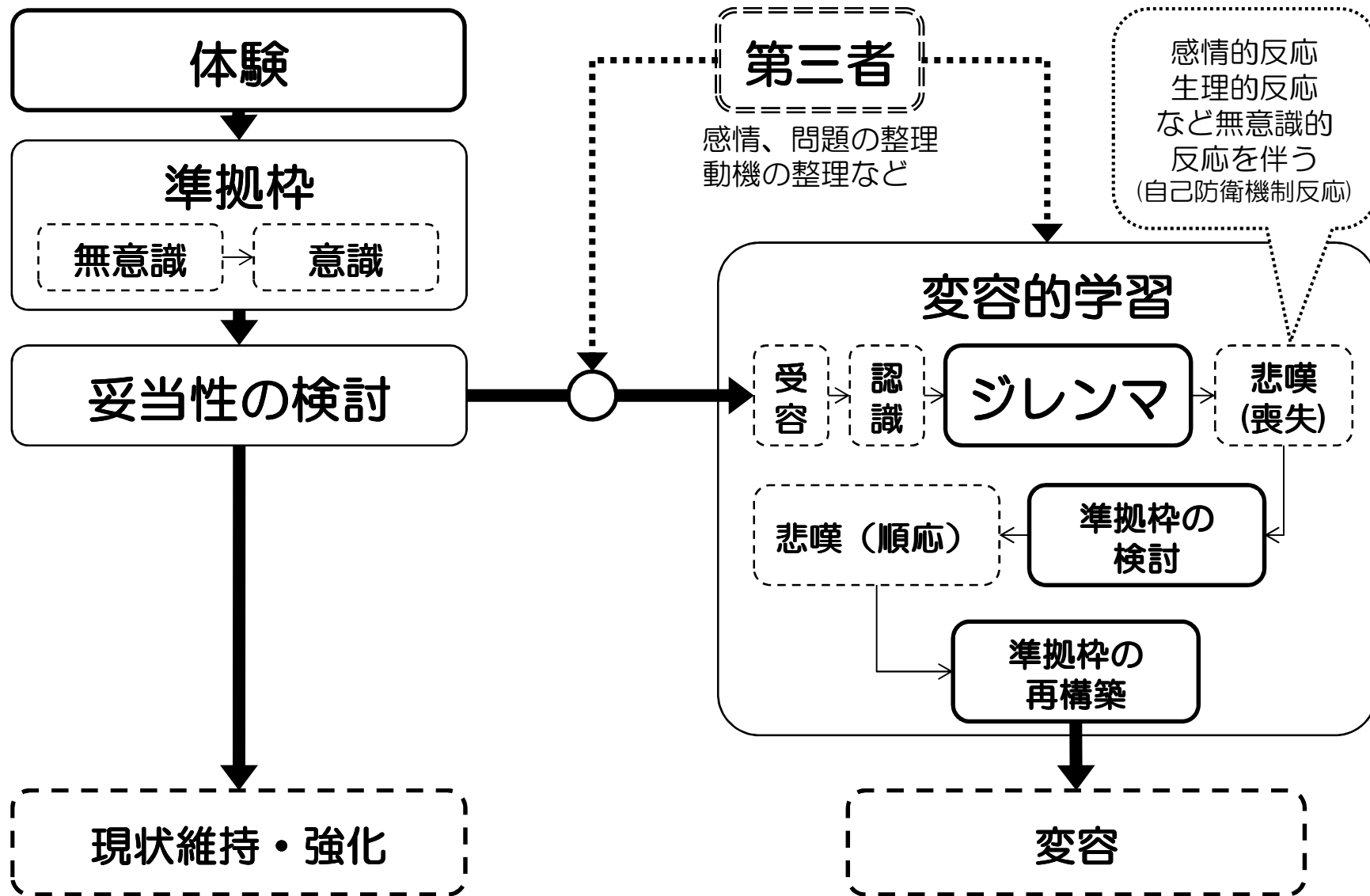
6-1 分かったこと

①メジロー、ボイド、ジャービスの変容理論は、実際の学習活動上では結びついている。

- 学習活動の過程は、ジャービスの学習課程モデルにおおよそ沿った流れになっている。
- メジローがいうところの準拠枠の無意識的な働きが、行動に大きく影響している。
- 準拠枠への気づきから、ボイドの受容→認識→悲嘆→受容のプロセスを経て準拠枠の検討・再構築が行われている。→この過程はメジローの変容的学習に相当

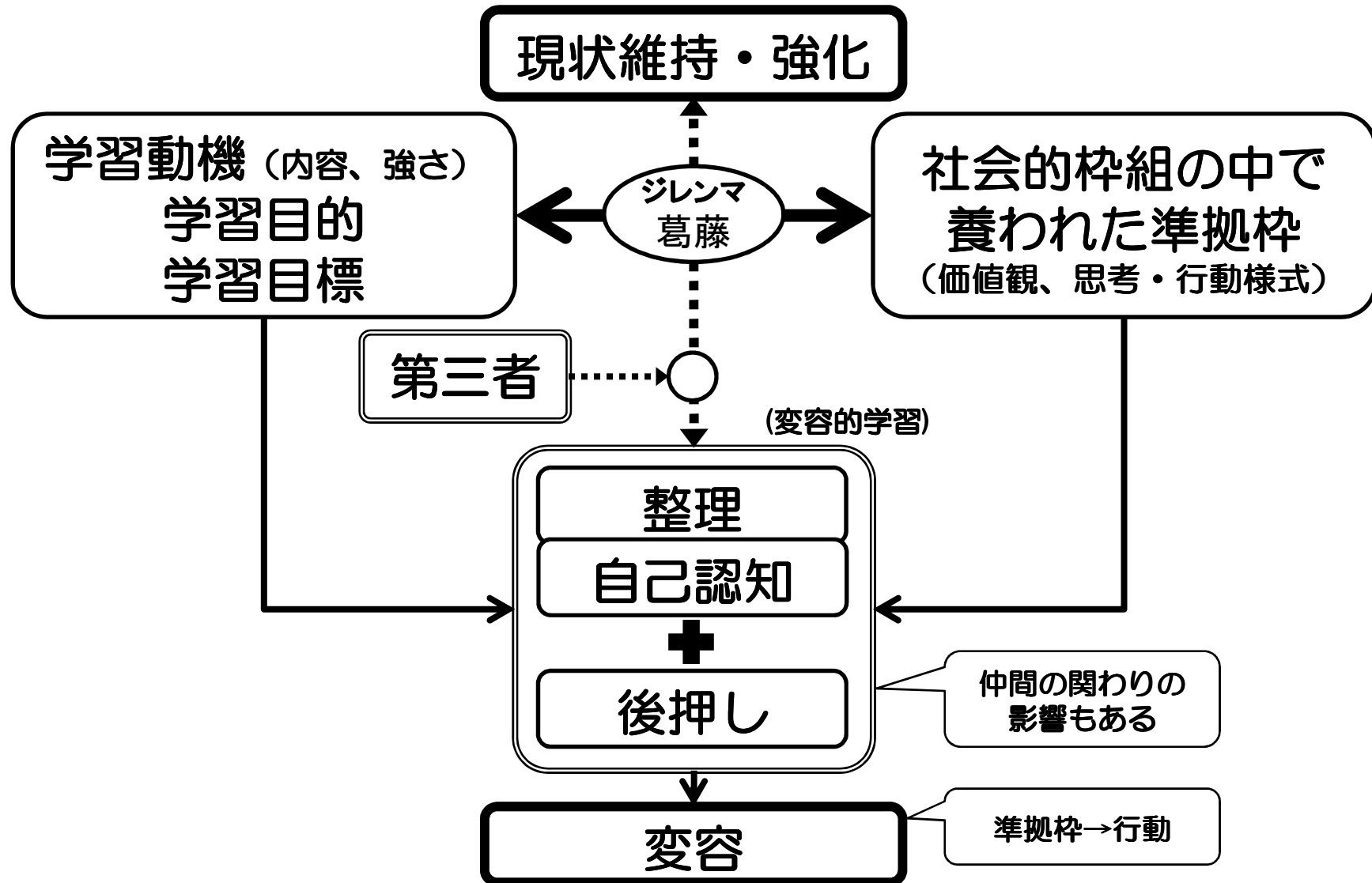
②変容と現状維持・強化との分岐点には、第三者の関与をきっかけとした「準拠枠」の認知、検討、再構成が大きく影響をもたらしているように思われる。

6-2 分かったこと(学習過程のモデル)



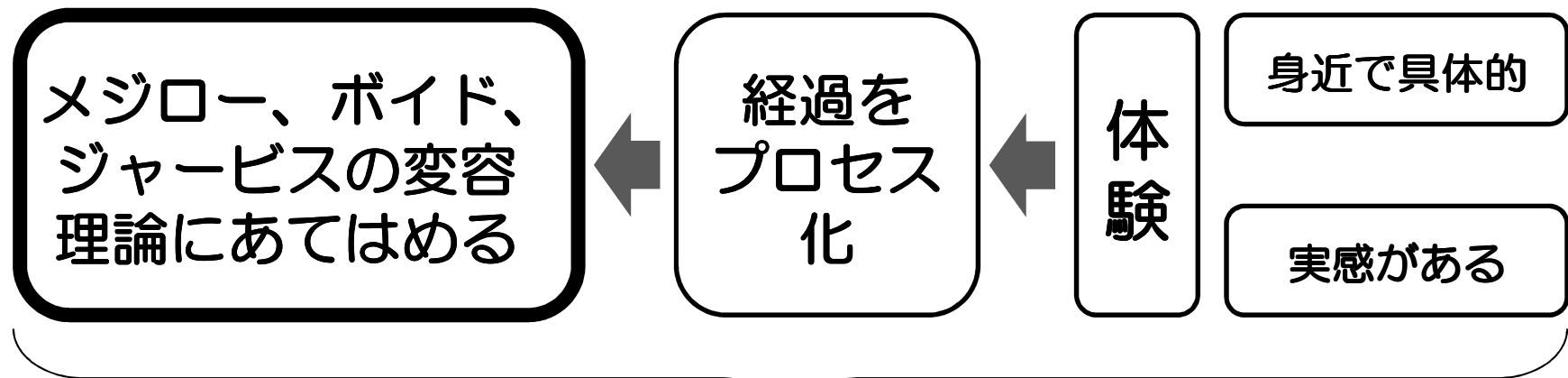
6-3 分かったこと

(変容と現状維持・強化との関係性モデル)

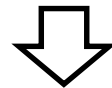


7-1 事例②

事例① 今回の研究発表に関わる一連の学習活動



- ①メジロー、ボイド、ジャービスの変容理論と実際の学習活動との結びつき。
- ②変容と現状維持・強化との分岐点への第三者の関与の影響。



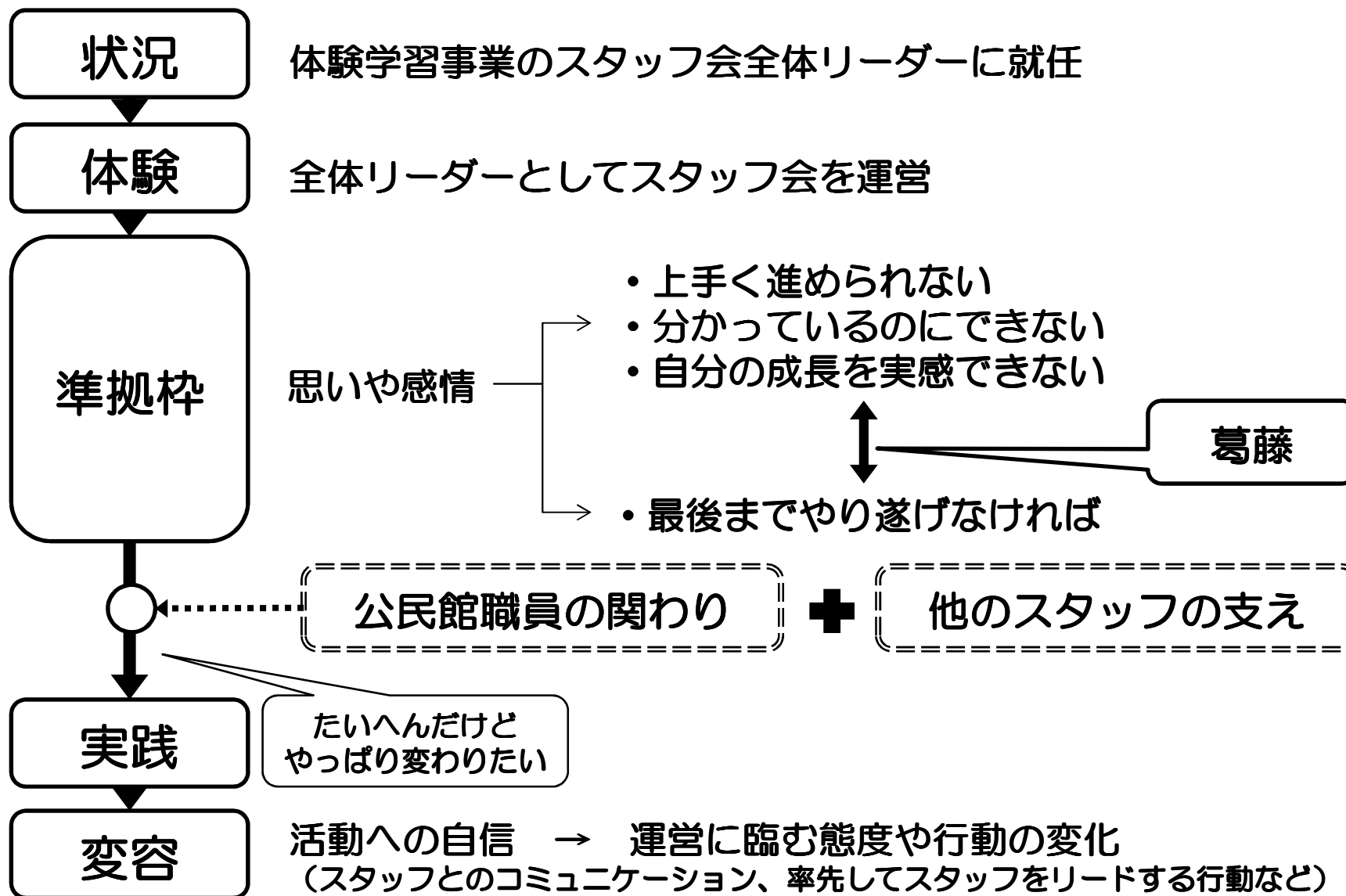
仮定される学習課程と関係性のモデルを
社会教育現場での学習活動にあてはめて検証

7-2 事例②

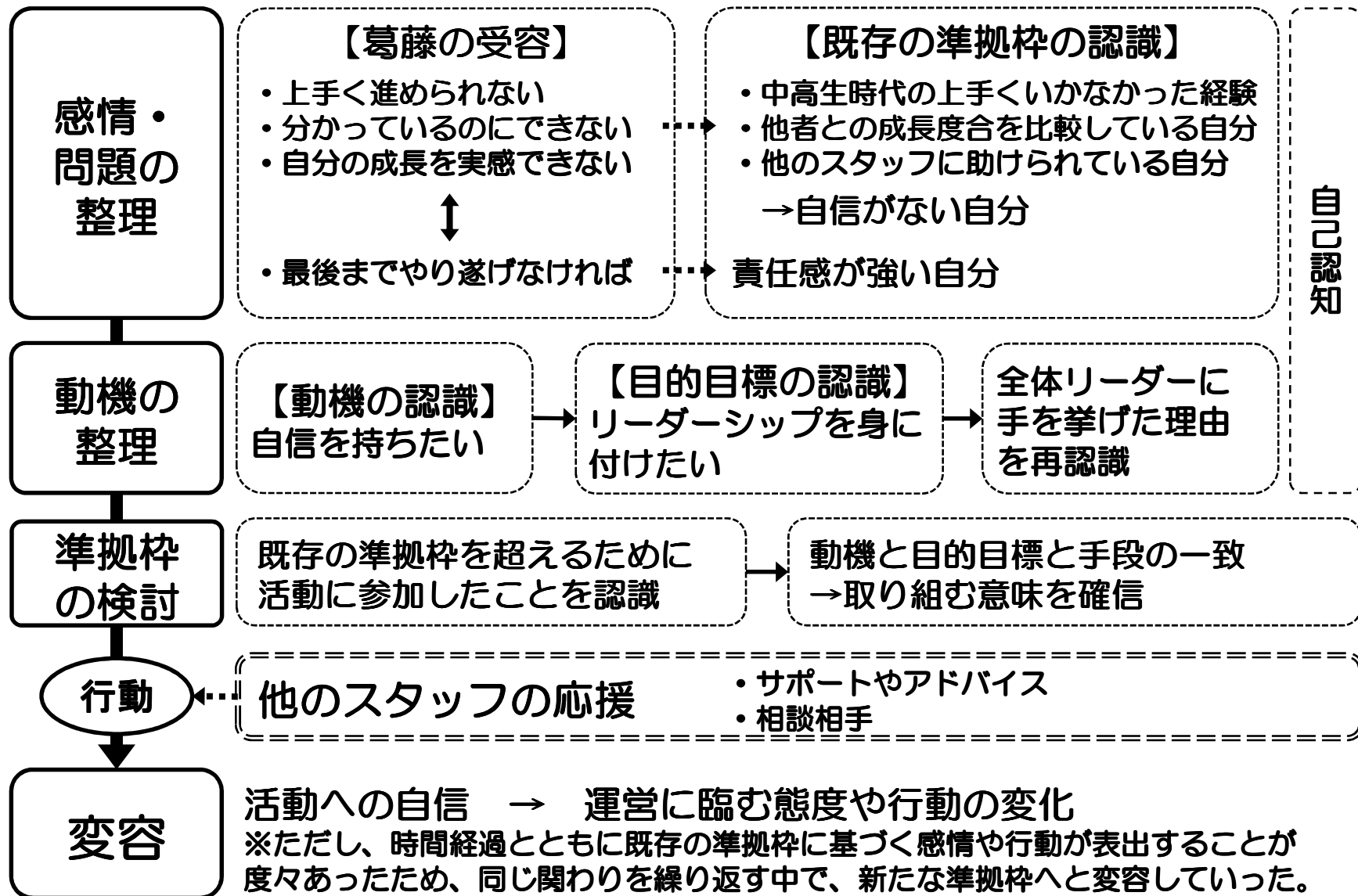
祇園西公民館の体験学習事業のスタッフ活動の中から、全体リーダーを務める学生の学習活動を取り上げ検証します。

- 大学生(20歳 女性)
- 平成25年5月からスタッフ活動の全体リーダーとして活動中
- 聴き取り内容をプロセス化し、検証

8-1 学習活動の経過



8-2 第三者の関わりりの経過 (職員の関わり)



9-1 分かったこと

- 学習活動の過程では、これまでの生活を取り巻く社会文化的枠組によって身に付いた「準拠枠（価値観、思考・行動様式）」と学習動機（内容、強さ）、学習目的、目標との間で意識、無意識レベルでの葛藤が生じる。
 - 葛藤から「現状維持・強化」もしくは「変容」への分岐には、既存の「準拠枠」が大きく影響する。
 - 変容に向かうには、既存の準拠枠を検討、再構築する変容的学習に至ることが大きな課題となる。
- 準拠枠の認識及び動機の整理、再確認による自己認知が必要。
- 体験を通して既存の準拠枠を認識し、動機を整理することで学習者は自身が学習活動に参加した理由を再確認する。そして、動機－目的目標－手段の整合性から学習する意味が明確になることで変容へと向かう。

9-2 分かったこと

- 学習者自身は、無意識に働く準拠枠を認識することは困難であり、第三者の関わりは変容的学習に進むための重要なきっかけとなっている。
- 第三者の関わりは、あくまで変容的学習のきっかけ、後押しするものであり、学習者本人の目的意識が変容の大前提となる。
- 仲間がいることも後押しとなる。
- 時間経過とともに変化したはずの準拠枠が、従来の準拠枠に戻ろうとする傾向が見られるため、期間や頻度も変容を左右する大きな要素の一つとなる。
- 公民館の学習活動で期待する変容を得るためには、公民館職員にメンターの役割が求められる。とくにボランティア養成等リーダー養成を伴う活動や地域活動では、そのよう関わりが有効と思われる。
- 仲間の存在も変容を後押しする力となるため、学習者が良好人間関係を築き、仲間の輪を作ることを支援することも必要と思われる。

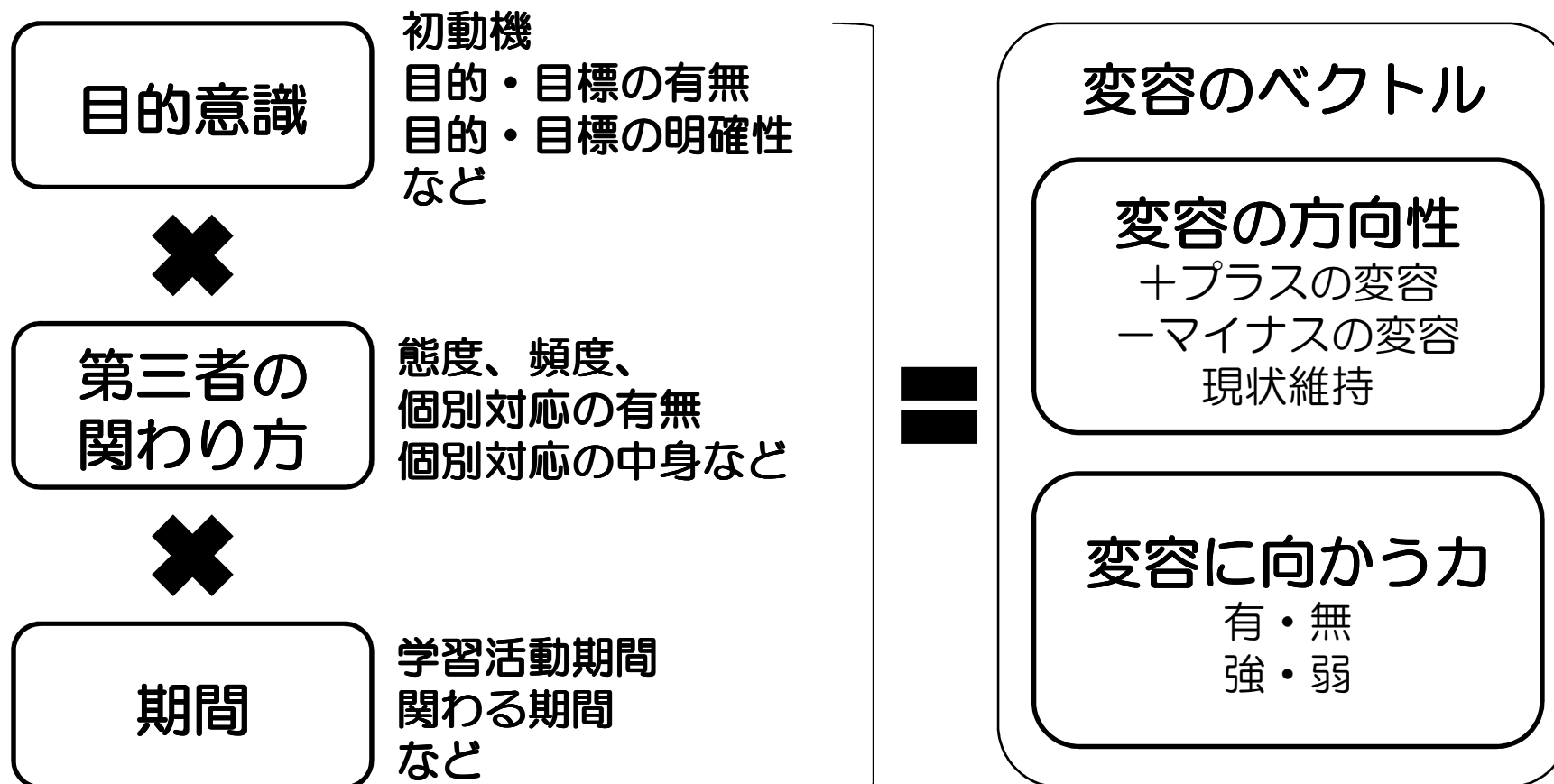
10-1 変容的学習の条件

変容的学習に向かわせるには次のような条件が必要と思われる。

- 学習者に寄り添う態度。
- ジレンマの状態に対して、問題と感情を整理し、準拠枠を認識、受容させる力。
- 動機と目的目標と手段を整理し、整合性をとり、学習活動に意味づけする力。
- 面談等の個別対応を伴う学習支援。
- 一定期間以上の学習期間及び関わる頻度の確保。

10-2 変容的学習の条件

変容のベクトルは、第三者の関わりと目的意識、学習活動及び第三者が関わりを持った期間によって、その方向性とそこに向かう力が決まってくると思われる。図に示すと以下のようなになる。



11-1 事例③

これまでの事例検証によって生じた仮説を祇園西公民館の事業にあてはめて、変容に向かうための学習支援の条件の成立を検証します。

- 2013年4月以降に実施したまちづくりやまつり実行委員会等のリーダー養成を伴う14事業
- 学習者の目的意識や職員の関わり、活動期間を数値化し、変化との相関を検証

12 事例③の検証について

「目的意識×第三者の関わり×期間」をもとにした次表を実際の事業にあてはめ、変容的学習条件と変容との関係性を検証。

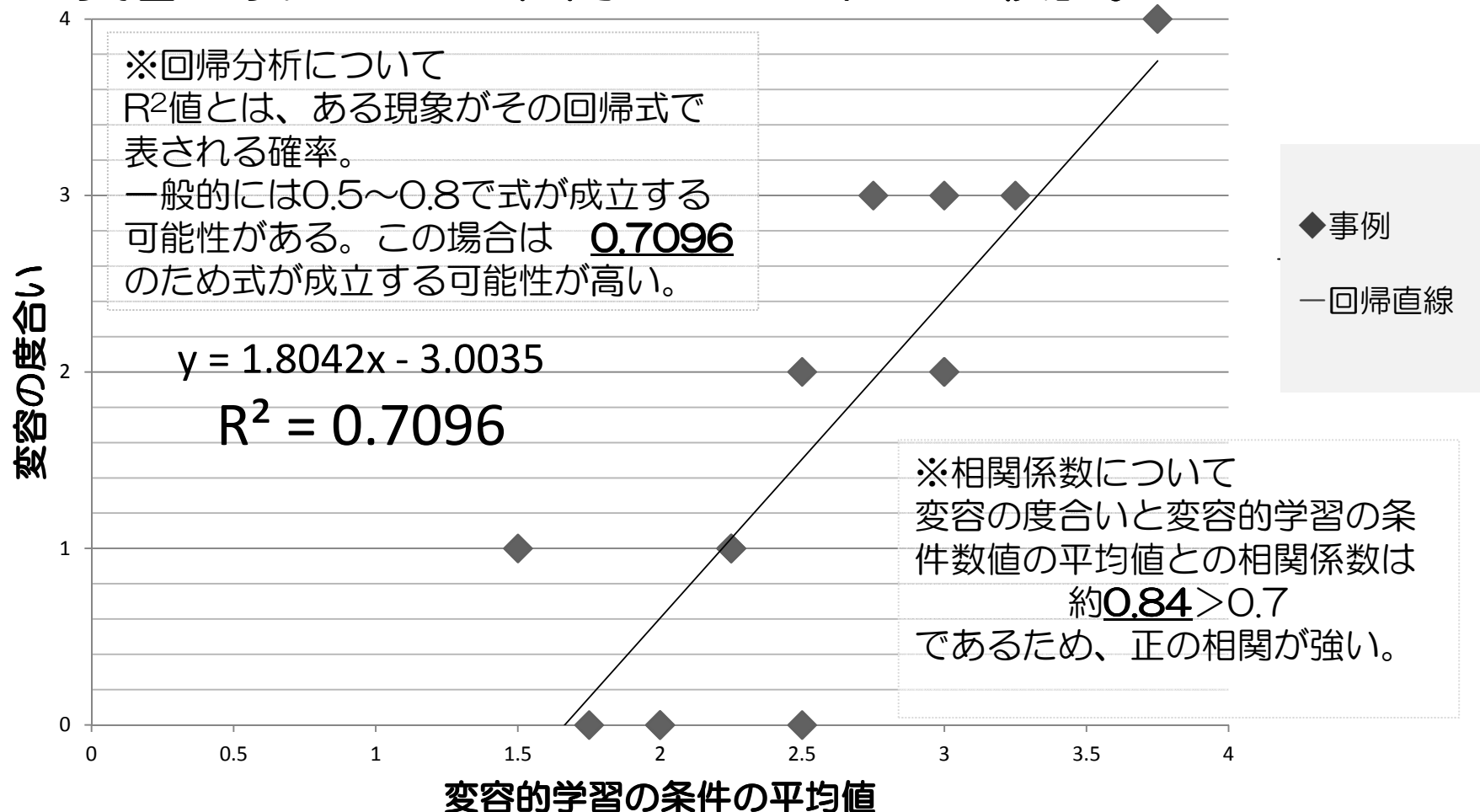
	項目	説明	評価数値
変容的学習の条件	活動期間	評価対象とした学習者の活動期間	4：通年、3：6～12ヶ月月末満 2：2～5ヶ月、1：2ヶ月月末満
	目的の性質	活動に対する学習者の目的目標の性質	4：大義名分と個人目標（両方） 3：個人目標、2：大義名分、1：不明
	動機の整理	職員による学習者の動機や目的目標等の整理の度合い	4：動機→目的→手段の関係性が明確 3：ある程度明確になるまで整理 2：漠然としたまま、1：未整理
	対応形態	職員の学習者への対応形態	4：面談対応あり、3：個別指導・助言あり 2：少人数・グループ単位の対応まで 1：全体対応のみ
	対応頻度	職員が学習者に対応した頻度	4：2回/月以上、3：1回/月 2：1回/2月、1：全体で1～3回以内
変容	学習によって生じた変容の度合い	5：変容が生じている、4：変容が生じ始めている、3：変容へと動いている、2：変容へと動き始めている、1：現状維持・強化	

13 事例③の数値評価

No.	事業名	対象	活動期間	目的の性質	動機の整理	対応形態	対応頻度	平均	変容ベクトル
1	子どもチャレンジくらぶスタッフ活動	スタッフ会全体リーダーの学生	4	3	4	4	4	3.75	4
2	小中学校家庭教育講演会企画実施活動	管内小中学校PTA役員（会長、副会長が主）	3	4	4	2	2	3	3
3	子どもチャレンジくらぶスタッフ活動	スタッフ会の部門別リーダーの学生4名（全体リーダー除く）	4	3	3	4	3	3.25	3
4	公民館まつり実行委員会活動	公民館まつり実行委員会の幹部役員（団体・グループ利用者）	3	2	2	3	4	2.75	3
5	子どもチャレンジくらぶスタッフ活動	スタッフの学生	3	3	2	2	3	2.5	2
6	まちづくり活動支援「団体B」の支援	管内のまちづくり団体Bの役員（70歳代が主）	4	4	2	3	3	3	2
7	広島市祇園西公民館Web情報ステーション	ICTボランティア	4	4	2	3	3	3	2
8	子育て応援交流会	子育てに関心ある住民	4	2	3	2	2	2.25	1
9	まちづくり活動支援「団体A」の支援	管内のまちづくり団体Aの役員（70歳代が主）	4	4	1	3	1	2.25	1
10	平和学習会	子ども会役員	1	2	1	2	1	1.5	1
11	防犯講習会	防犯組合長	1	2	2	3	1	2	0
12	教養講座	地域団体担当役員	3	2	1	3	1	1.75	0
13	コンサート	主催団体代表	4	4	1	3	2	2.5	0
14	女性リーダー研修会	女性会会長	3	2	2	3	1	2	0

14 事例③の散布図による検証

1 1-3の数値評価をもとに、変容的学習の条件の平均値と変容の度合いとの相関をグラフ化して検証。



15 分かったこと

- 変容的学習の条件と変容の度合いの間には、相関関係がある可能性が高い。
- 変容の度合いには、変容的学習の条件が総合的に影響している。
- 変容の度合いは、変容的学習の条件が全体的に整っているほど高くなる傾向にある。
- よって、変容的学習の条件を全体的に整え。総合して支援することが、より学習者の変容をもたらすことにつながると考えられる。



そのための具体的な条件とは？

16-1 変容に向かうための学習支援の条件①

条件	項目	内容
動機の確認 →変容の大前提	初動機の確認	その活動を始めようと思った理由やきっかけを確認する。
	目的目標の確認	<ul style="list-style-type: none">・その活動を通してどうしたいのか、どうなりたいのかを確認する。・大義名分的なものである場合、個人的な目標も確認する。 ∵大義名分は課題志向になりがちであるため、個人目標を意識することで、目標志向への転換を図る。
	興味関心の確認	<ul style="list-style-type: none">・初動機や目的目標を確認するためのきっかけとなる。・学習者自身が初動機や目的目標が分からない、漠然としている場合に考えるための足掛かりとなる。

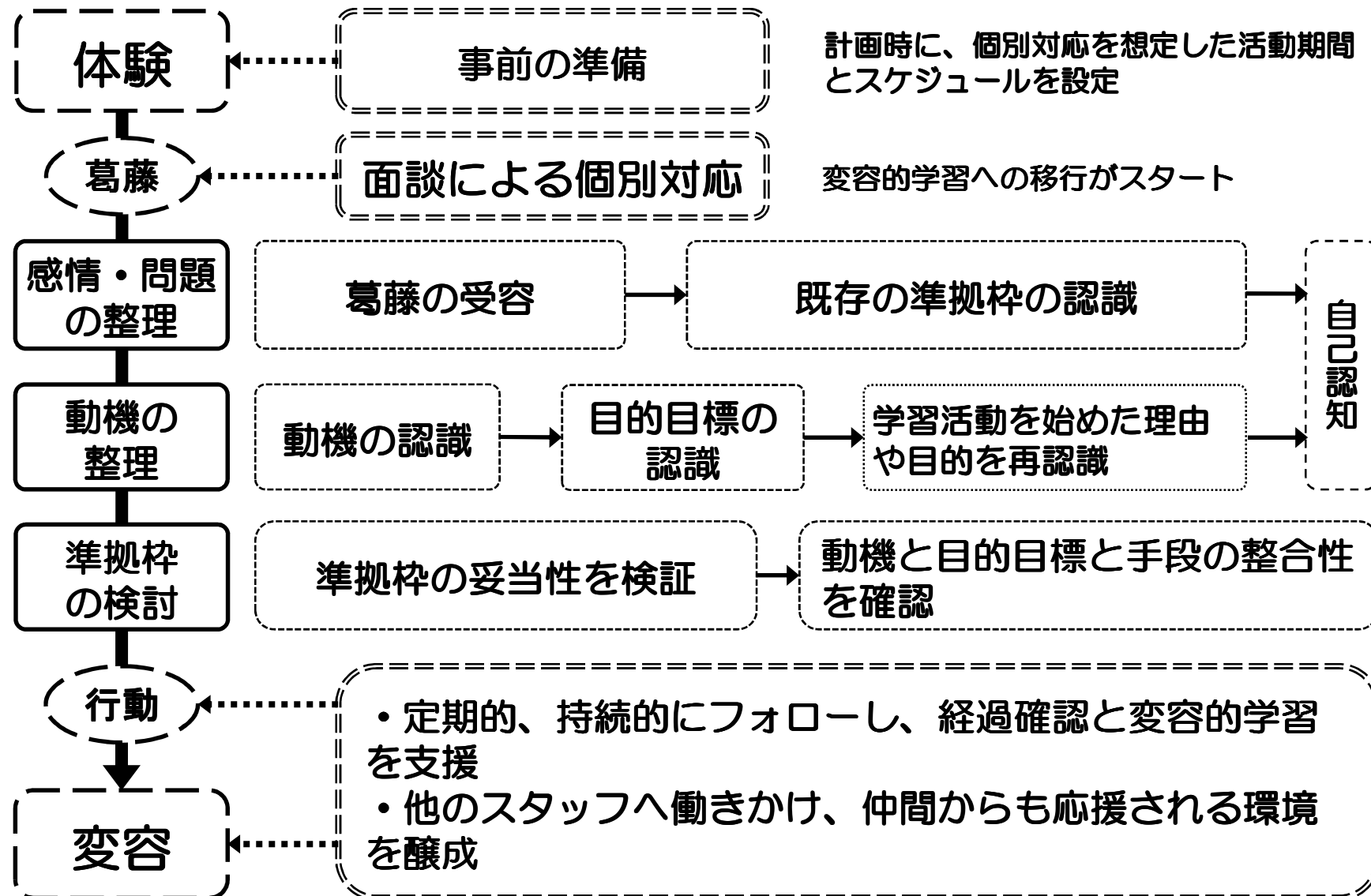
16-2 変容に向かうための学習支援の条件②

条件	項目	内容
感情や問題の整理	葛藤の受容の支援	何に対して問題を感じているのか等、感情や問題を整理し、葛藤の状態を受け入れられるよう支援する
	準拠枠の受容及び認識の支援	<ul style="list-style-type: none">・意識していない準拠枠の存在への気づきを支援する・既存の準拠枠に基づく思考様式や行動様式の認識を支援する
準拠枠の検討	準拠枠の妥当性の検証を支援	動機や目的目標と照らし合わせて、既存の準拠枠に沿って行動する妥当性の検証を支援する。
	動機、目的目標、手段の整合性の確認	活動に参加すること、学習することが、動機と目的目標に対する手段となっているのかを確認し、参加すること、続けることの意味を明確に認識できるように支援する。

16-2 変容に向かうための学習支援の条件③

条件	項目	内容
学習活動期間の確保	一定以上の活動期間	<ul style="list-style-type: none">・ 変容的学習の支援にあたっては、支援行動や信頼関係の醸成などのために一定以上の対応時間の確保が必須となる。・ 変容的学習活動の習慣化にも一定の期間の確保が必要となる。
	定期的、持続的な関わり	<ul style="list-style-type: none">・ 定期的、持続的な関わりによって、活動の中で生じた変容の定着を支援する。∵時間経過とともに以前の状態に戻る傾向があるため。・ 動機の確認、感情や問題の整理、準拠枠の検討は一度では困難であり、途中も経過確認が必要となる。
	面談等の個別対応	以上を踏まえると、個人面談やその他個別対応は必須となる。

16-3 変容的学習の支援モデル



17 おわりに

- 第三者の関わりは、あくまで変容的学習のきっかけや後押しするものであり、学習者本人の目的意識が変容の大前提となる。→行き先がなければ変容は生じようもない。
- 第三者の関わりによって変容は生じるが、時間経過とともに以前の状態に戻る傾向が見られる。そのため、変容を定着させるためには、変容に向かうベクトルを維持する必要がある、その点で十分な学習期間と対応頻度を確保することが大切となる。
- 学習者が、自身の動機や目的目標に沿った学習活動を継続し、変容に向かえるように、変容的学習の条件を総合的に満たした支援を行うことが公民館等社会教育現場の職員に求められる。
- 社会教育関係者自身が学習者として実践することが大切。

参考文献

- 小池源吾・志々田まなみ「成人の学習と意識変容」広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部 第53号 2004年
- 藤村好美「ロバート・D・ボイドの変容的学習の理論に関する一考察」広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部 第55号 2006年
- 赤尾勝己「成人学習者の認識変容のメカニズム -欧米の成人教育理論の成果を手がかりに-」関西大学教育学会 2002年
- 安川由貴子「認識の変容に関わる学習論の考察 -J.メジローの変容的学習論からG.バイトソンを読む-」京都大学生涯教育学・図書館情報学研究Vol.8. 2009年
- シャラン・B・メリアム編「成人学習理論の新しい動向 -脳や身体による学習からグローバリゼーションまで-」2008年 <邦訳>立田慶裕・岩崎久美子・金藤ふゆ子 荻野亮吾訳 福村出版 2010年
- ピーター・ジャーヴィス編著「生涯学習支援の理論と実践 -「教えること」の現在」2007年 <邦訳>渡邊洋子・吉田正純訳 明石書店 2011年